

ラテンアメリカ都市物語

= 第2回 =

リオデジャネイロ素描 (ブラジル)

菅藤 和彦

リオとサンパウロを結ぶシャトル便でサンパウロを発ち、ものの30分足らずで、眼下に海岸が見え、細長い紐みたいな岬が見えてくる、リオはもう近い。その先の岬を越えるとバッラの海岸があり、サンコンラッド、レブロン、イパネマそしてコパカバーナ（以降コパと呼ばせて頂く）の海岸線へと続く。グアナバラ湾の入口に巨岩見えたらもうサントスドモン空港だ。空港に降り立つと、途端にムツとする熱気に包まれる、これがリオなのである。

空港からタクシーでもものの5分足らずのところ私に住んでいるアパートがある。この界隈に住んで数十年が過ぎてしまった。子供達が生まれ育ったところだけに今さら離れ難く、これまで5回の引っ越しはいずれも歩いて5分以内のところだった。海沿いには造園家ブルーメックスが作った公園が濃い緑の帯となって広がっており、その先にフラメンゴの海岸、サントスドモン空港、ニテロイ大橋、その遙か彼方に海岸山脈の山並が霞んで見える、この眺めは飽きない。

フラメンゴの隣のボタフォーゴはまだ湾の中、リオ特有の奇岩に挟まれた小さな湖と言った感じの入江はカレンダーでお馴染みの風景、ボンデアスーカルの奇岩が正面に鎮座する。ボンデアスーカルの右手の丘を越えたら、大晦日の花火で知られるコパの海岸が長々と続く、その端が岬になっていて、岬の向こうにはイパネマ、レブロンがある。コパの背後は低い岩山に囲まれており、そこにはファベラと呼ばれる不法住宅がいくつもへばり付いている。一方、イパネマ、レブロン地区はキリスト像の有るコルコバードの丘に登ると良く分かるのだが、海岸線からほんの数ブロック入

と大きな湖がある。リオでは背後に丘と言うか岩山の有る無しで、その土地の値段が大きく変わる（ファベラへのアクセス近辺の道路では犯罪が多発）、イパネマ、レブロン地域がリオの高級住宅街を形成しているのはその所為である。日本だったらさしずめ山の手と言うことになる。そこからさらに30km近く行ったところにオリンピック競技村があるバッハがある。ここは近年開発された地域で、所謂、街角のバルは無く、米国の様にコンドミニウムとショッピングが地域を形成している、それ故、ブラジルのフロリダと呼ばれているが通勤には2時間ぐらいかかる。他にも、湖の奥にはジャルジンボタニコ（植物園で有名）、ウマイタと言った地区があるが、リオが世界に誇るのとはなんと言ってもコパカバーナ。

確かに、コパの海岸線に連なる全長6kmに及ぶ高層ビル群は圧巻、その多くは高級アパート乃至はホテル。ところが通りを一つ入ると、ワンルームマンションの類が圧倒的に多く、その人口密度は香港と同じく



バルの昼間（写真はいずれも筆者撮影）

らいと言われている。ビル群の背後の丘にあるファベラ群は、イパネマ寄りにはパボン・パボンジーニョ、一方、反対のポンデアスーカル寄りにはバビロニアと言った名の通ったものがあり、ちょうど真ん中辺りに、余り知られていないがラデイラデ・タバジャラがある。

コパは海岸線と並行してノッサ・セニョーラとバラッタ・リベイロの二つのメインストリートがあり、そこに商店街が集中している。昼夜問わず人通りが絶えない、リオ一番の繁華街だと言える。そのコパの丁度中央にシケイラカンポス通りがある。ボタフォゴからコパに抜ける古いトンネルを出てすぐ左折した通りで、海岸まで全長2km足らず、途中にラデイラデタバジャラのファベラに通じる坂道があり、海岸寄りには地下鉄の駅もある。

この通りの海岸に抜ける手前の角に、モンタグスと言う名前のバルがある、バルの表にある看板を見ると、レストラン、サンドイッチ、バルと書いている。何の変哲もない普通のバル。ただ、立地はコパのど真ん中(ポスト5)にあり、アトランチカ海岸通りから歩いて数十歩。その所為か海水浴客は無論のこと、一目で観光客と判る群れ、この地域に多い Hostel を目指すバックパッカーの若者達、仕事帰りのサラリーマン、海岸に涼みに行く若いカップル、時間帯によって、様々な顔を持っている通りなのである。バルの斜め前には公園があり、樹が鬱蒼としている。バルの中には7つぐらい小さなテーブルがあり、軒下にも10ぐらいテーブルが並んでいる。

私がこのバルを知ったのは、コパにあるビンゴに通っているうちに、何時も三人でやって来るオバサン達と仲良くなり、彼女たちに誘われて行ったのがきっかけだった。バルに着いたのに、彼女たちは店の中に入る

うとしない。ガルソン(ボーイ)が、ビール樽を店の隅から持ってきて店とは反対側の歩道に置き、その上に板を載せ、簡易椅子をその周りに並べ、さあ座れと言う。歩道とは言え、脇に新聞売りのスタンドがあるので人通りの妨げにはなっていない。それにしても、バルの軒下のテーブルががら空きなのによりによってこんな所だと思っていたら、ガルソンがショップ(生ビール)と一緒に灰皿を置いて行った。法律上は軒下であっても、この国では禁煙だが、此処なら大っぴらに喫煙出来る訳だ。私のようにタバコ好きには有り難いスペースなのである。いつしか私は足繁くこのバルに通うようになった。

絶えることのない人の波を見ながら煙草を吸い、生ビールを呑む趣向(と言っても私は下戸なのでそう何杯も呑めないのだが)、生ビールが一杯5リアル(130円程度)というのも嬉しい。(海岸通りのキオスクだと倍以上取られる。)

夕方、7時前後からボチボチとグループのメンバーが集まってくる。真っ先にやって来るのはミリアン、彼女はこの限界で生まれ育った、通りかかった人の多くが彼女に声を掛ける。60過ぎで孫もいる、コパの女ボスと言った風格がある。彼女は椅子に座ると一番小さな生ビール(これだと4リアル)を頼み、おもむろに携帯電話を取り出し、アチコチに電話をかけ始める。間もなく、バルの上のアパートに住むタニアがいそいそと駆けつける。彼女は気管支を患い、医者からタバコを厳禁されているのだが、隣に住んでいる娘夫婦に隠れてこのバルでタバコを吸うのが楽しみ、そうこうしているうちに、総合病院に働いている医者のソランジが顔を火照らせてやって来る。近くのジムひと汗流した後の一杯を楽しもうと言う訳だ。元政府機関のお偉いさんだったというネルソンは白い髭をキレイに揃え小太りな体をリズムカルに揺すりながら8時直前にいつも現れる(彼は唯一ボタフォゴの住人で地下鉄でやって来る)。中小企業のオヤジ、シャリーはネルソンとは対照的に大男、毎朝5時に地下鉄に乗ってリオ郊外の工場に行き、帰りは夜10時近く。この不況で大変らしい。だから週末しか現れない、彼らが揃い始め、アクセサリーの店を任されている小柄なデニーゼが疲労困憊といった感じで席につくと、早速いつもの癖あたり構わずスラングを連発する(ポーハ、ブッタケパリウ、カセッチ等)。仕事柄、上品な服を着こなしてだから、初めて会う人は呆気にとられる。彼女に



看板



夜の外観

としてはこれがストレス解消法であり、慣れている我々はそのコントラストを楽しんでいる。サンバの名手サンドラは若くして亭主を無くし、一人で二人の子供を育て上げた強者。彼女もデイジーに負けずスラングを頻繁に飛ばす、気が向くとわざわざ家からサンバの楽器を持ってきて、それでリズムを取りながら歌い出す。ネルソンがそれに合わせて歌いだすと、両手を上げて踊り出すのも出てくる。いつの間にか道路はパーティー会場に早変わりする。普段は7、8名程度集まるが、多い時には十数名にもなる。無論飛び入りでこの踊りの輪に入ってくるものもある。

此処に集まってくるのはどう言う訳か皆一人暮らしで、ネルソンを除くと、この界限で生まれ育っている、日本だったらさしずめ江戸っ子と言うことになる。なかならず、亭主と死に別れた未亡人が多く、彼女達の亭主は軍人だったり、公務員だったりするから結構な安定収入がある。大抵は亭主とか家族の写真を大事そうに持っている。最初のうち、こんな老人クラブみたいな辛気臭いところと思っていたが、考えてみれば、私自身古希を過ぎており、このグループの中では年配の部類に入ると判ってからは気が楽になった。会話の輪に入って一緒に笑えるようになった。それに彼らは実に陽気なのである。

モンタグスの向かいにあるバルからサンバの一種とも言えるパゴデが聞こえてきた、元フラメンゴの有名選手でブラジル選抜のキャプテンだったジュニオが週に一度コパの海岸で、友人とビーチサッカーを楽しんだ後、皆で太鼓の音に合わせて謳い騒いでいる所為だ。普段はモンタグスとは対照的にガランとした店なのだが、ジュニオが来ている日だけは見物も合わせ大賑わ



店内光景

いとなる。通りの反対側でパゴデを楽しみながらの一杯となる、これも結構楽しい。

コパに通うようになって分かったのだが、この地域にはユダヤ人が多く住んでいる、バラッターレイロ大通りにはユダヤ人の社交クラブがあるし、そこから左程離れていないところに教会、学校もある。無論例の丸い帽子をかぶった男も結構通る。それだけに、コパでは彼らの冠婚葬祭に出くわす機会が多い。例えば、葬儀には亡くなった人が女性の場合、女性の参列者は、自分の着ている服の一部を切り取り棺に供える習慣があったりする、口の悪いのは、だからユダヤの葬儀に女性は安物の服を着て行くと揶揄する。

モンタグスでは、席に座るとガルソンが注文を聞き、それを書いた紙を置いていく。客は飲み食いの都度その紙をガルソンに渡し、一杯呑む度にマークしてもらう、勘定の時にはそれを見て自分の飲み食いした分を確認した後ガルソンに渡せばよい。実に明朗会計なのである。キッと店の主はユダヤ人なのだろう。コパに通うようになっていつしか私はこの街のユダヤ人を意識するようになった。

オリンピックの時、市当局は外人観光客に対し、移動はなるべく地下鉄を利用する様、薦めていた。だからこの期間、地下鉄は観光客で溢れ、様々な言語が混雑した車両の中で飛び交った。良く見ると、夫々自分の国を表したシャツを着、手には国旗を大事そうに握っていた。誰かがフランス万歳！と叫ぶと、少し離れた所でドイツ万歳！と叫び返す。車内には、スタジアムの熱気がまだ残っている様だった。

コパの海岸通りにIOCのオリンピック・グッズを売る巨大なテント建てられていたこともあり、観光客の多くはそれに近いシケイラカンポスの駅で一斉に下車、そこから海岸まで100m 足らずをワイワイ騒ぎながら通って行った。モンタグスで呑んでいる我々はこの人波に呑まれそうになりながら、オリンピック気分浸っていた。

カリオカはコパの海を海の女王と呼んでいる。長い船旅の末、漸く辿りついた新天地に対する敬愛を込めた表現だろうが、遠い祖国への郷愁をも感じさせる。それくらいコパの海岸は彼らにとって特別な意味がある。そういった、コパに住んでいると言うプライドが呑み仲間からも伝わってくる。

今年9月にはジルマ大統領がインピーチメントで大

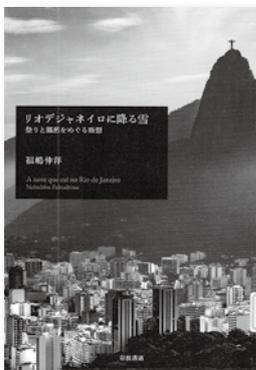
統領の座を追われ、ルーラ率いるPT（労働者党）政権は十数年の幕を閉じ、次いで汚職容疑の濃い、前の下院議長が議会で虚偽の証言をした角で議員権を剥奪された。いずれも、政治の腐敗による大掛かりな汚職構造が原因だった。

そのPT政権は彼らの政治基盤である東北ブラジルをこれまで重視してきた。（オリンピックの開会式、閉会式のショーでは東北ブラジルの民族音楽、踊りが実に多かった。）その結果サンパウロ、リオといった大都市にまで、東北ブラジルのものの考え方が浸透するようになった。大都市のもつ、本来コスモポリタンなカルチャーに、東北ブラジルの荒涼とし気候風土の中で培われた荒削りで、粗暴とも思えるカルチャーが持ち込まれた訳で、それは政治危機の影で余り注目を集めていないが、実際には大都市の社会生活をギクシャクしたものになっている。（サンパウロは20世紀に入ってから急速に発展したが、その過程で東北ブラジルからの労働力を数多く吸収したことで、それほどカルチャーショックは無かった。一方、ブラジリア遷都までこの首都だったリオには公務員、軍人、学生といったグループが存在していた。ルーラが登場する以前の彼らの知っている東北ブラジルの人間とは、実際には自分達と同じ教養を持つ富裕階級がほとんどだった、それがPT-政権に入り一変した。）

モンタグスでのいっときは、私にとって貴重なひとときだともいえる。

（かとう かずひこ リオデジャネイロ在住。元川崎製鉄南米事務所長）

ラテンアメリカ参考図書案内



『リオデジャネイロに降る雪 ―祭りと郷愁をめぐる断想』

福嶋 伸洋 岩波書店

2016年7月 140頁 1,800円+税 ISBN978-4-00-025573-8

素晴らしい海岸と岩山などの自然の眺望に恵まれ、それでいて古さとモダンが織りなす都市、リオデジャネイロは、ボサノヴァの甘いメロディ、参加する者が至福感をもつカルナヴァル、愛と郷愁（サウダーヂ）を感じさせる誰もが恋する街。

書名は、リオの外国人向けポルトガル語クラスで一緒になったたぶん旧東ドイツからの女子学生が暑いクリスマスに不平を言った際に、著者が答えた「リオに雪が降るとすれば世界が終わりの時だけよ」という比喻から付けられている。

ブラジル文学とボサノヴァ等音楽の研究者である著者（共立女子大学教授）が、2003年に1年間滞在したリオへの郷愁を込めて綴った良質のエッセイ集。

（桜井 敏浩）